

日曜寺子屋家族塾 の取り組み 4

古川 秀明

仲間が集まる・・・中井哲郎

親と子が一緒に勉強する意味を学び、親子で勉強の意味を考えられる場を私が提供したら何か良い変化が起こるかもしれない。

この仮説を形にするにはどうしたら良いのだろう。

私ひとりの力で学校のような大きな施設を作るのは無理。

この時に私の頭の中に「塾」という形が浮かび上がった。

勉強を教える前に「なぜ勉強をするのか」を教える塾。

いや、なぜ勉強するのかを学びながら教科学習を平行して行う塾のほうが良いのではないだろうか・・・。

あれやこれやと考え調べていると、「寺子屋」という日本の中世から明治にかけて広く庶民に浸透し、識字や算術などのレベルを世界トップレベルにまで引き上げていた教育システムにたどり着いた。

それから私は勉強に関する持論や寺子屋を応用した「私塾」という形の教育システムについて、ことあるごとにいろんな人に語った。

私の話を聞いた人の反応は様々だったが、中井哲郎という現役の中学教師（理科担当）の反応は他の人とは違っていた。

中井は私と同じことをずっと考えていたという。

中井も寺子屋という教育システムに強い関心を持っていた。

意気投合した私と中井は時間も忘れ、寺子屋の構想について話し続けた。

中井は勉強の意味や意欲の重要性について、以下のような論文をまとめている。

◆ 今の学校教育のイメージは「暗い」？「明るい」？

今の学校教育のあなたのイメージは、「暗い」ですか？「明るい」ですか？

仮説実験授業を提唱された板倉聖宣さんは「教育の未来は明るい」と断言されています。

板倉聖宣さんは、「**教育が生まれ変わるために**」という本の〈はしがき〉に〈教育の内容と方法を全面的に改革すれば、「子供たちは素晴らしく意欲的に勉強するし、人間的なあたたかさを示しもする」ということを見てきています〉と書いておられます。

仮説実験授業は提唱されてから、今年で 50 年が経ちました。でも、50 年たってもなかなか仮説実験授業は広まりません。それは、教育を全面的に改革しようとしているからなのです。

「第一部 教育の現状」には「自分の判断で行動する人の時代」

— 登校拒否児の増加は明るい社会の前ぶれ

という論文が載っています。

「不登校になることは悪いことなのでしょうか？」

このことについて、板倉聖宣さんは教育の歴史の視点から、今の教育の現状を紐解いておられます。

◆ 教育の未来を語る

1872年＝明治5年以来、近代学校制度が始まって、就学率はどんどん上がっていきました。明治維新以降、日本は近代国家を目指すために、「欧米の文化を全面的に模倣吸収しよう」と高い学歴を得た人材の育成に力を注いできました。その学歴主義によって日本は支えられてきました。そして、子供たちの学習意欲も高められてきたというわけです。その甲斐があって、日本は高度成長を経て、先進国の仲間入りを果たしました。その背景には、学歴社会の構造がありました。（いい高校に入って、いい大学に行って、いい会社に就職して、高い給料をもらう—エリート意識）

ところが、進学率は100%にはなりません。高校進学率は94%くらいで止まり、中退者も増えてきました。高校卒業率は88%、大学進学率は35%くらいで止まっています。（大学の進学率は1976年の40.9%がピークでした。この年はちょうど私（中井）が大学に入学した年です。）

そして、高度成長は1975年でストップしました。高度成長がストップしたのと期を一にして進学率もストップしたのです。

では、どうして進学率がストップしたのでしょうか。それは、高度成長を果たした日本には、もう外国から模倣する知識が必要なくなったからです。高学歴の人材がそれほど必要なくなったのです。高い学歴さえあれば、いい会社に入れて、高い給料がもらえるということは、もはや幻想になってしまいました。いい会社どころか、就職することもとても難しい時代になってきているのです。

そして、逆に増えてきたのが登校拒否＝不登校です。また、社会問題ともなっているニートと言われる若者も増えてきています。

◆ 明るい話〈不登校〉

では、1975年で高校、大学の進学率が止まったのは悪いことなのでしょうか？

高校には行った方がいいのでしょうか？大学には行った方がいいのでしょうか？

進学率が止まったのは、「行かなくてもいい」と思ったり、たとえ行っても退学してしまう若者が増えたからです。そして、学校に行かない不登校の子供たちが増えているのです。

みなさんは、勉強が役に立ったという知識はどれくらいありますか？

不登校の子供たちは無言で〈何とか教育のやり方を転換してほしい〉と要求しています。そして、今の子供たちは昔の子供たちと違って、嫌いなものは〈嫌いだ〉という能力が出てきたのだとも考えられます。

子どもの要求にあう勉強とは何なのか。それは子供たちが「たのしい」と感じる〈たのしい授業〉なのです。

そして、自分で判断して、自分自身の興味、自分自身の考えで行動する人間を作っていくことが大切なのではないのでしょうか？

「教育が生まれ変わるために」 板倉聖宣（1999） P14~27 より

（補足・加筆 中井）

◆ 「学力低下」が叫ばれています

そもそも〈学力〉とは何でしょうか？

「子どもの学力、教師の学力」という本の

「子どもにとって学力とは」〈学力と意欲の関係について—学力か意欲か〉の中で、板倉聖宣さんは次のように書いています。

$$(1) \quad \langle \text{学校教育の成果} \rangle = \langle \text{学力} \rangle + \langle \text{意欲} \rangle$$

$$(2) \quad \langle \text{学校教育の成果} \rangle = \langle \text{学力} \rangle \times \langle \text{意欲} \rangle$$

〈学力〉と〈意欲〉の関係については、(1)と(2)の関係が考えられますが、あなたはどちらが正しいと思われますか？

(1) は意欲が0でも学力があれば、成果が上がったことにはなりますが、(2) なら意欲が0なら成果も0です。板倉聖宣さんは、(2) が正しいとされています。「いかに〈学力〉があっても、その〈学力〉を活かそうとする〈意欲〉がないことには、その学力は無用の長物となると思うからです。」とされています。

今の学校教育は、「学力よりも意欲が大切だ」と〈ゆとり教育〉が導入されたかと思えば、数年後には、その反動で「学力低下は危機的状況である」と〈ゆとり教育〉から一転して、授業時間数の確保に躍起になっています。明治以降の日本の教育の歴史をみれば、昔から〈意欲重視の時代〉と〈学力重視の時代〉が交互にやっています。

でも、その繰り返しばかりでは教育の発展は全く望めません。

◆ 子どもにとって学力とは

もともと、教育というものは「学習の条件が厳しい時ほど〈先駆者効果〉が期待できる」という傾向があります。「そのことを学んでいる人が少なければ少ないほど、希少価値が生じて、先駆者になりうる」のです。明治時代の大学生は、「日本を背負って学ぶ」という側面がありました。しかし、今はそういう〈先駆者効果、エリート効果〉は期待できません。「自分が勉強しなくても、他のたくさんの人が勉強している」ということになったら、学習意欲が低下しても当然ではありませんか。しかし、「学問や芸術そのものの素晴らしさに引き込まれる」ということなら、他人との関係はほとんど問題になりません。〈たのしい授業〉というのは、そういう一人ひとりの内面的な好奇心、興味に訴える授業として成立するのです。

「学力というものは、私たちにとって、子供たちにとってどのようなものが必要かを考え直さなければなりません。」そのことを考え直す時に、どこから考え直せばいいのでしょうか。

私は「明治以前に戻れ」と言いたい。

たとえば、みなさんが江戸時代の寺子屋の教師になったとします。そのときに、何をほんとうに情熱をもって教えることができるだろうか」と考える必要があると思います。

「子どもの学力、教師の学力」板倉聖宣（2007） P11、P108 より

◆ 「大人の学び」について

日本では、「学ぶ」というと子供がするものと決まっているようでした。しかし、学ぶという行為は子供だけのものではない。明治以降の日本では、「学ぶということは大人になるための苦しみごと」というイメージが定着してしまったが、お稽古ごとは「たのしみごと」としてやるものだから、大人になっても続くのである。日本でも江戸時代には「学問」はお稽古ことのひとつであった。何かのためでなく、純粋な「たのしみごと」として大人も学び、本当の学ぶ楽しさを教えるものであって欲しいと思う。科学・芸術を学ぶと世界や人生が見えてくる。今、時代が変わりつつある。大人たちこそ「たのしみごと」としての学びの豊かさを若者に示してやれないものでしょうか。

「子どもの学力、教師の学力」 板倉聖宣（2007） P112 より

◆ いまなぜ〈たのしい授業〉か

「たのしい授業」という雑誌が1983年に増刊されて、今年で30年になります。それまでは、〈たのしい授業〉より〈わかる授業〉と言われることが一般的でした。

「たのしい授業の思想」という本は、「たのしい授業」という雑誌の考え方をまとめた本ですが、その中の〈いまなぜ「たのしい授業」か〉と〈「たのしい授業」の思想—〈わかる授業〉と〈たのしい授業〉〉という論文は、「たのしい授業」0号に載っています。

◆ いまなぜ〈たのしい授業〉か

人類が長い年月の間に築き上げてきた文化、それは人類が大きな感動をもって自分たちのものとしてきたものばかりです。そういう文化を子どもたちに伝えようという授業、そ

それは本来たのしいものになるはずですが。その授業が楽しいものになりえないとしたら、そのような授業はどこか間違っているのです。子供たちが自らの手で新しい社会と自然をつくっていく、そういう創造の力を育てようというのなら、なおさら、その授業はたのしいものでなければならないはずですが。だから、私たちは、「今なによりも大切なのは、〈たのしい授業〉を実現するよう、あらゆる知恵と経験と力を寄せ集めることだ」と考えるのです。

◆ 自ら新しい未来を切り開く喜びを

明治以後の日本の学校教育は、〈後進国型〉だったので、国をあげて外国を見習うことに情熱を注いできたのが、今ではいつの間にか多くの面で世界の先進国並みになったので、その目標を失うことになった、といってもいいのです。

〈外国に追いつく教育〉は、決められた一本道をつっぱしる教育でいいのですが、その時には、〈わかる授業〉だけでもすみます。しかし、〈外国を追いこしてしまった後の教育〉は自ら道を切り開くための教育なので、道を開く楽しみを教える〈たのしい授業〉以外にはありえないのです。

「たのしい授業の思想」板倉聖宣（1988）P10~23

以上中井哲郎の論文（2013年8月）

このように、私は学ぶ意味を、中井は学ぶ楽しさを語り合った。

私と中井が出した結論は、勉強する意味と楽しさを家族と一緒に学べる私塾を作ろう、そしてその形態は「寺子屋」という日本の伝統ある教育形式を踏襲しようということになった。

塾の名前は「日曜寺子屋家族塾」に決定。

私が勉強する意味を教える「道徳」を担当し、中井が「科学」を担当することになった。

その時中井の作った案内文が以下である。

◆ 日曜寺子屋家族塾に参加しませんか？

日曜寺子屋家族塾は、今までの塾の概念とは全く違います。今までの塾は、進学するため、または、学校教育の補習をするための塾でした。

そうではなくて、明治以前の江戸時代の寺子屋のように、「学問」をお稽古ごとのように純粹に「たのしみごと」として体験してほしいのです。しかも、子供も大人も含めた家族一緒にです。そして、科学・芸術を学ぶことで、新しい世界や人生が見えてくるようになれば、人生をより豊かに過ごすことができないだろうかと考えているのです。また、それにより家族の変化もみられるのではないかと仮説を立て、検証しようとしています。

このようにして、私の考えに賛同してくれる仲間がまずひとりできた。